2017年春の年会

シニアネットワーク連絡会セッション

対話１０年の報告と新しい方式について

Reports of the 10-year steps and the new trial on dialogue between students and seniors

（1）学生とシニアの対話１０年を振り返って

(1) 10-year steps on dialogue between students and seniors

*松永一郎[1]

[1]日本原子力学会シニアネットワーク連絡会

１．はじめに

２００６年５月、シニアネットワーク連絡会（ＳＮＷ）が原子力学会の一部会として設立された。その主要な活動の一つが「学生とシニアの対話」である。　この活動は２００５年７月、原子力関連の技術者ＯＢの自主的集まりである「エネルギー問題に発言する会」により始められ、１年後にＳＮＷに引き継がれた。

経験を積んだＯＢたちと、これから社会に飛び立つ学生たちが５０歳の年齢差を超え、原子力を中心とした日本と世界のエネルギー・環境問題について対話するというものである。それから現在までの１２年間、この活動は途切れることなく続けられている。

はじめは原子力系の大学生を対象としたが次第にその範囲を拡大し、一般理工学系、教育系の大学、高専生も含まれるものとなっている。また、回数、参加者の総数は多くはないが、大学教員、小・中・高校教諭、一般社会人が入った対話会も実施している。

対話会から発展したものとして「学生とシニアの往復書簡」がある。これは原子力を専攻する一部の熱心な学生を対象として、各種課題についてシニアと学生がメール交換／対話会を通じて問題点を深堀するというものである。２００９年から２０１２年まで４年間実施して最終的に本に編集し、年度ごとに限定出版した。なお、重点課題である東電福島事故に関する事項を再編集し、２０１２年に電気新聞社より新書版にして市販した。

ＳＮＷの対話方式は文科省の人材育成事業を請けた大学連合の「原子力ヤング・エリート育成事業（幹事校：北大)」の講義実習の一部に取り入れられ、２０１１年度から現在まで、年度ごとに３回実施されている。

ＳＮＷの活動と関連して、２００８年１２月にＳＮＷ東北が設立されている。ＳＮＷ東北としての独自の対話活動を行っているが、東北地区におけるＳＮＷ主催の対話会ではＳＮＷ東北からも半数のシニアに参加してもらっている。また、ＳＮＷの内部組織として２０１１年２月にＳＮＷ九州が設立され、九州地区での
対話会を主体とした活動を行っている。

２．対話の実績

（１）年度別の対話実施回数

年度別の対話会実施回数を表１に示す。

表１　年度別の対話会実施回数

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
回数	5	9	１１	１１	１４	１４	１１	１４	１３	１１	１１３

２００６年から２０１５年までの１０年間で１１３回の対話会が開催されている。２００６年、２００７

年

を除く８年間では、平均して、年に１２回開催されている。

（２）年度別の対話会参加者数および対話会参加者数の累計

対話会に参加した学生、教員、シニア、オブザーバの年度別の参加者数を図１に、対話会参加者数の累計を図２に示す。

図１　年度別対話会参加者数

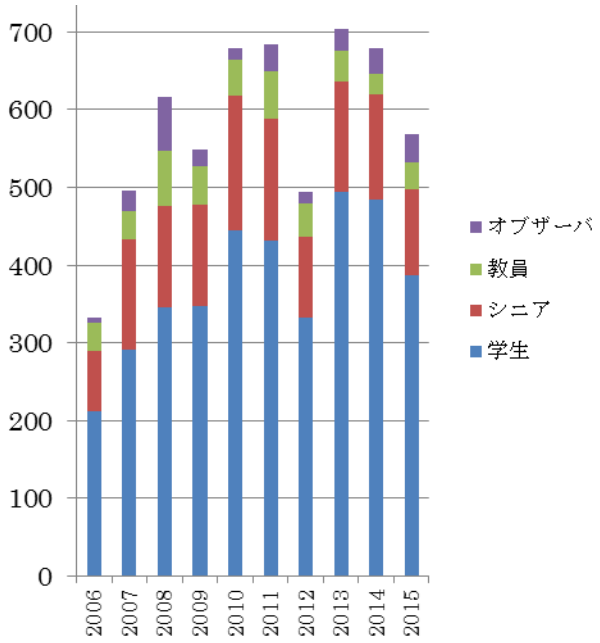
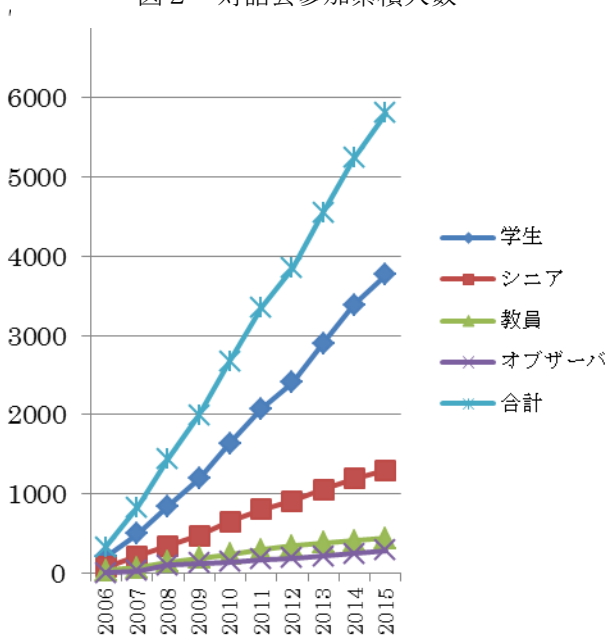


図２　対話会参加累積人数



２００６年を除き、対話会の参加者は少ない年で５００名、多い年で７００名である

また２０１５年までの累計参加者は約６０００名、学生は約４０００名、シニアは約１３００名である。

対話会は通常学生６人～７人に対してシニア２人の比率の少人数グループ制で実施しており、１回の対話会参加者は少なくて２０名、多いときは１００名を超える。

（３）対話会実施校（大学、高専、自治体）

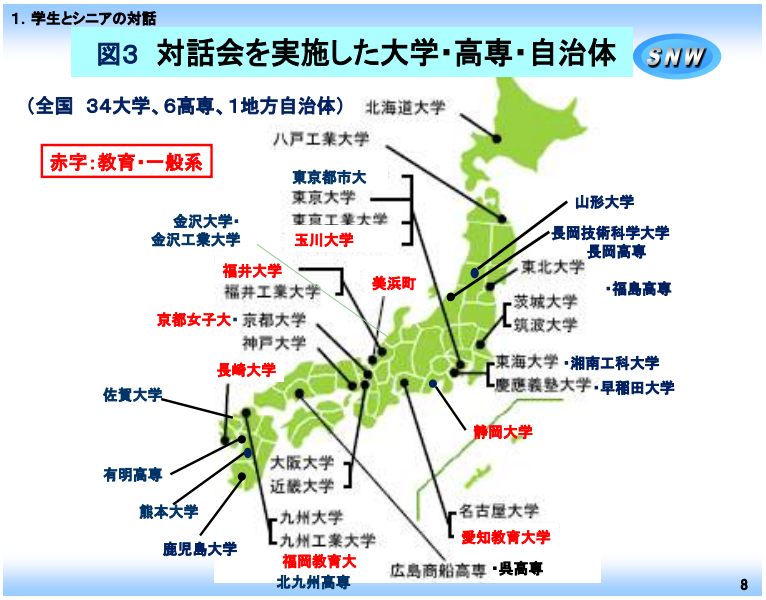
実施大学、高専、自治体の分布を図３に示す。

全国の３４大学、６高専、１地方自治体で実施している。実施校を図３に示す。

対話会は各大学、高専が単独または２校共同で開催するケースが殆どであり、講座に組み入れられたものが多い。

学生連絡会／ＳＮＷが共催して関東または関西で複数校が参加する対話会もある。

開催頻度は毎年のものから、隔年、単発とさまざまである。開催回数の多いものは以下のとおり（2015 年度まで）



・１１回・・東北大
・９回・・八戸工大
・８回・・福井大／福井工大、広島商船高専
　　関東複数大学
・７回・・愛知教育大
・６回・・北大、九大

（４）学生の専攻別対話会参加者数

図４に学生の専攻別の対話会参加者数を示す。

２０１２年度以降、毎年参加していた北大が原子力ヤング・エリート育成事業の対話会に移り、原子力系の参加数が４０人ほど減っている。

教育系では、常連参加校の愛知教育大学が担当教授の退官により継続できなくなった。

理工学系では、ＳＮＷ九州が熊本大学、佐賀大学、鹿児島大学、北九州高専、有明高専等を新規に開拓し、参加者が大幅に増えている。

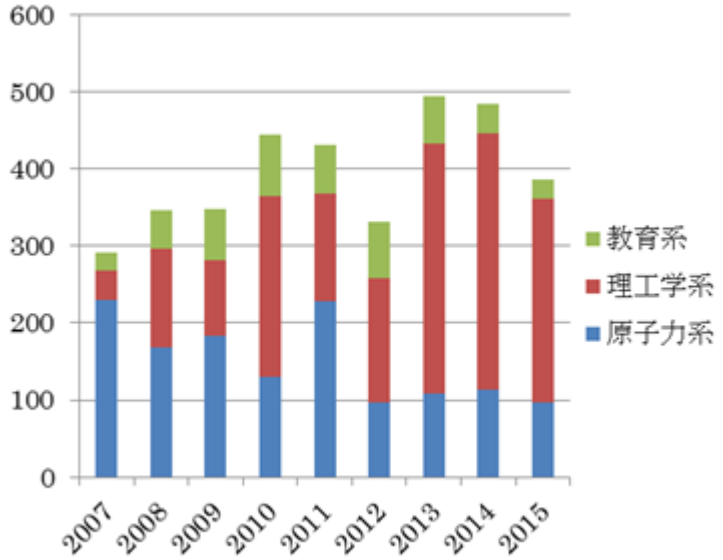


図４　専攻別対話参加者数

２００７年から２０１５年までの参加者数の比率は原子力系３８％、理工学系４８％、教育系１４％である。

３．対話の評価

対話会の評価は参加した学生により決められる。そのために、当初より、対話会の終了後にアンケートを実施している。アンケート内容は途中で多少の変更はあったが次の９項目である。評価は４段階で行う。

ａ．「学生とシニアの対話」の必要性　　ｂ．エネルギー危機に対する認識の変化
ｃ．原子力に対するイメージの変化　　ｄ．事前に聞きたいと思っていたことは聞けたか
ｅ．対話の内容は満足だったか　　ｆ．講演の内容は満足だったか
ｇ．自分の学科との関連性　　ｈ．再度対話への参加希望　ｉ．本企画を通して全体の感想・意見など

この中で、特に評価に直結する「対話内容の満足度」と「対話の必要性」の年度別の調査結果（全対話会平均）を図５と図６にそれぞれ示す。

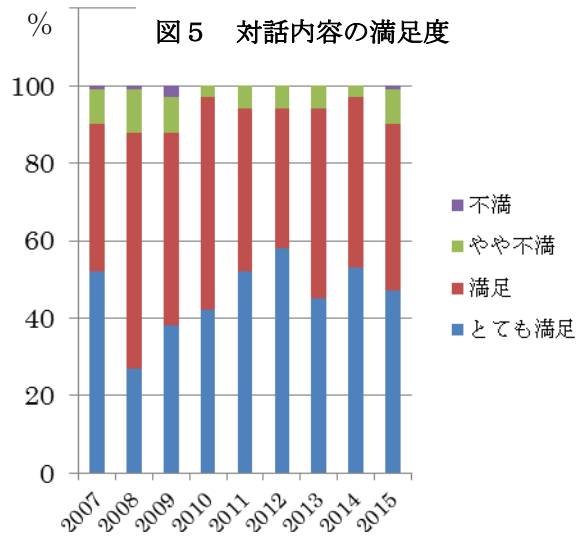


図５　対話内容の満足度

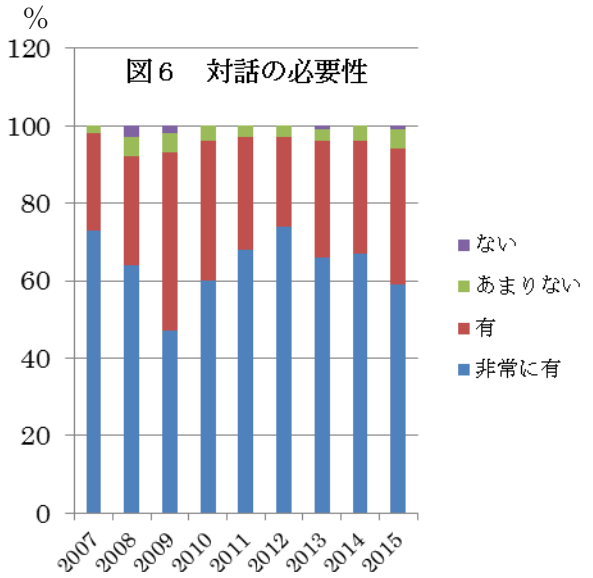


図６　対話の必要性

対話内容の満足度は「とても満足」「満足」を加えてどの年度でも９０％近いか、それを超えている。

また、必要性については１００％近くがあると考えている。特に東電福島事故の後である２０１２年の対話会では「とても満足」、「非常にある」との回答がほかの年度よりも高くなっている。

４．往復書簡の実績

（１）参加学生、参加シニア

関東および関西地区の原子力学会学生連絡会を中心とする学生達と、学生数を上回るシニア間で行われた。

表２　往復書簡の年度別参加学生数と参加シニア数

年度	学生		シニア数
	数	所属校	
２００９	９	東大、東京都市大、北大、茨城大、慶大	１８
２０１０	１３	東大、東京都市大、早大、京大、阪大	２２
２０１１	１８	東大、近大、東海大、北大、阪大、東工大	１７
２０１２	２０	東大、阪大、京大、東京都市大、東海大	２４

（２）実施方法

学生の幹事が参加学生からテーマを募集する。それぞれのテーマに対して、シニアの参加希望者を募る。学生からテーマに関する質問がメールで出され、それに対して所属シニアから回答（複数人）。それに対してさらに学生とシニア間で追加質問、意見等が交換される。交換期間は２～３か月。

メール交換が終了した後、対話会（関東複数校、関西複数校）を開いて、疑問点、問題点の詰めを行う。

最後に往復書簡集として編集し、限定出版した。

（３）テーマ、学生からシニアへの質問数、書簡集ページ数

表３　往復書簡の年度別テーマ／質問数、書簡集頁数

年度	テーマ（質問数）
２００９ （137 頁）	原子力の社会受容性(13)、原子力の環境影響(4)、高経年化(5)、耐震性(4)、ＪＣＯ臨界事故(11)、高レベル放射性廃棄物(7)、劣化ウラン弾(4)、テロ対策・規制(7)国際関係・核不拡散(3)
２０１０ （140 頁）	原子力発電の必要性(7)、原子力の安全性(20)、核燃料サイクル(10)、放射性廃棄物処分(10)、対外戦略・核不拡散(21)
２０１１ （258 頁）	原子力の安全性(37)、１Ｆ事故の遠因(12)、エネルギー政策(38)、核燃料サイクル・放射性廃棄物処理処分(16)
２０１２ （333 頁）	原子力の安全性(33)、エネルギー政策(10)、核燃料サイクル・放射性廃棄物処理処分(12)、原子力と社会(30)

（注）質問だけでなく、学生とシニアそれぞれが意見を述べている、

５．おわりに

学生とシニアの対話会については、開始後４年目（ＳＮＷとして３年目）の２００９年８月に中間報告書を作成し、関係者および関係部所に配布しました。そのあと８年間、まとまった形としての報告はされていません。今回、良い機会を得たので概略報告をさせていただくことにしました。

対話会が始まった当初は「原子力ルネサンス」の風潮下、学生もシニアも前向きのテーマで対話しました。ちょうど半分を過ぎたところで東電福島事故が発生し、テーマもそれに関係したものが中心となりました。しかしながら、対話に参加した学生達の原子力の重要性に関する認識には事故前後での差異はみら

れません。対話会の重要性について改めて再認識した次第です。

最後に当たり、一貫して財政的、事務的な支援をしていただいている電事連・電工会および学会事務局に対して深甚なる感謝の意を表します。

---

*Ichiro Matsunaga[1]

[1]SNW